足立区

酒合戦200年。江戸の空気を楽しむ

～古くて新しいまち千住～

千住では江戸時代、付近の酒豪が集まり「酒合戦」といわれた大酒宴が開かれました。このイベントには当時の文人たちが審査員として招かれ、絵巻が多数描かれるなど江戸で評判となりました。このように古くからにぎわいを見せてきた千住には、現在でも古きよき風情を感じられる酒場や雰囲気ある建物が点在しています。酒場をめぐり、まちを歩き、千住でタイムトリップしてみませんか。

千住には古くからある個性的な酒場が多い。明治10年創業の「大はし」は千住の老舗。戦後からずっと継ぎ足しているだしを使った肉豆腐は人気の一品で、遠くからわざわざ立ち寄る客も多いという

江戸と昭和が混在するまち

千住を歩いていると、古くから残る建物や江戸時代の町割を継承した路地が多く、江戸から現代までのいろいろな時代を垣間見ることができます。

千住の魅力は、江戸時代から近年までの建物がモザイク状に散らばっているところ。江戸、明治、大正、昭和、平成と、それぞれにぎわってきた千住には見どころがたくさんあります。

まちを南北に貫く旧日光街道周辺は、江戸時代は宿場町として栄え、今は商店街としてにぎわいます。当時は間口に対して課される税もあり、間口が狭く、奥に長細い町割がつくられました。街道に面して店、その奥に住居、蔵という並びの商家が多く、さらに裏手に貸家がつくられるようになり、路地が増えていったといわれています。

複雑な網目のような路地を歩くと、思いがけなく魅力的な店が出現することもしばしば。駅近くでも一歩裏道に入ると生活感が感じられ、甘味処に蕎麦屋、ゆったりくつろげる喫茶店などいろいろな店に出合うことができます。

また、千住はテレビや雑誌にもたびたび登場するように、都内でも有数の銭湯と酒場が充実したまち。最盛期の昭和30年代には36軒あったという銭湯は、重厚な宮造り様式の古い趣のあるものから、プールのある銭湯や新しいモダン銭湯など現在全

観光スポットをまわりスタンプを集めると、オリジナルグッズがもらえるスタンプラリーを実施中

部で10軒あり、身近で気軽に広い湯船を楽しめます。

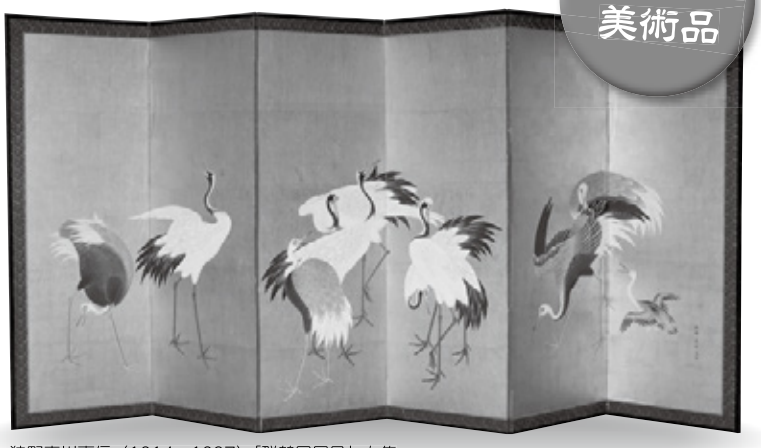
酒場は気楽に立ち寄れる安くておいしい店が多く、夕方ともなれば飲み屋街には仕事帰りのサラリーマンや女性客などたくさんの人が吸い込まれていきます。

千住の酒場は、北千住駅西口を出て左、細長く伸びる通称「飲み横（飲み屋横丁）」や、昭和30年代の香りを残す「毎日通り飲食店街」など、気軽に一杯を楽しめる立ち飲み屋から老舗の店まで個性的な店がそろっています。

飲み横は戦後バラックからはじまり、最盛期は１００人も「流し」がいたとか（渥美二郎も千住の「流し」出身！）。今は学生ほか若い客層も増え、若いオーナーの新しい店も多く、こだわりの料理やさまざまな飲み歩きイベントを楽しめます。

まち歩きに疲れたら、大きな湯船で疲れをすっきり落とし、よりどりみどりの酒場を放浪…千住で遊んでみませんか。

旧家からの美術品



狩野素川壽信（1814〜1897）「群鶴図屏風」右隻

にぎわい栄えた大千住

江戸時代、千住宿は、品川宿・板橋宿・内藤新宿と並んで江戸から地方へ延びる街道の最初の宿場町、江戸四宿のひとつで、多くの人が行き交っていました。天保15年（１８４４年）には、人口約1万人の千住宿は四宿の中で規模が最大でした。

日光街道の初宿であった千住宿は江戸の北の玄関口で、旅に出る人にとっては旅立ちのまち、明治大正期までは江戸近郊の名所のひとつとして舟の遊覧先だったこともあり、江戸の人にとっては近郊の遊び場でした。

また、江戸下町との距離も近いため、文化交流も盛んでした。荷物の重量をチェックする貫目改所が設置され、宿屋よりむしろ商家の多いまちとしてにぎわい、旦那衆が芸術家を支援した、ちょっと粋なまちだったようです。

江戸時代後期になると商業が栄え、明治時代を迎えるとさらに発展しました。この頃は「大千住」と呼ばれるほどにぎわい、江戸文化が花開きました。江戸絵画の狩野派、琳派、そして谷一門の絵師たちや明治画壇の画家たちが競い合うように美術品を制作し、屏風などの調度類、床の間を飾る掛け軸などに商家は競って江戸絵画や什物を求め、画師や木彫師など制作者の支援を行い、暮らしに彩を添えました。

当時の経済的繁栄と文化的な豊穣さを知ることができる大千住時代の美術品が千住から数多く確認されています。

「どぶ板で名倉れましたと駕籠（かご）で来る」と江戸時代の川柳にも詠まれた骨つぎの名医、名倉医院。入口は長屋門で江戸時代の名残がある

歴史ある建物

今でいう再生紙を扱う旧地漉紙問屋「松屋」横山家の家屋。江戸時代の伝統的な商家建築で、荷物を運び込む１階の空間を大きくとるために２階の床と兼用する踏み天井や、軒を深くとる出桁（だしげた）造りなどが特徴的

昭和４年に建てられた印象的な建物は、NTT東日本千住ビル

江戸時代の ちょっとのんきな酒飲みイベント
千住酒合戦 200年！

今からさかのぼること江戸時代の出来事。文化12年（1815年）10月21日、千住の飛脚宿の主人中六こと中屋六右衛門の還暦を祝い、近郷の酒豪を集めて〝千住酒合戦〟と呼ばれた酒の呑みくらべイベントが開かれました。そこには酒井抱一、谷文晁、亀田鵬斎を筆頭に当時高名な多くの文人・絵師が審査員として招かれました。

この酒合戦は江戸でも評判を呼び、多数の絵巻が書き写され、この後完成した絵巻の展覧会が開かれるなど後世の語り草ともなりました。

当時の千住の文化度の高さや繁栄ぶりを象徴する酒合戦から、今年はちょうど200年。さまざまなイベントで千住が盛り上がります。

郷土博物館では、電大ギャラリー（東京電機大学）をお借りして秋に酒合戦の展示を予定しています。

また、千住地域の若手の居酒屋グループ「千住酒合戦」がバルで日本酒を飲み歩くイベントを開催予定で、そのほかにも、さまざまな企画が予定されています。今年の秋は千住の飲み歩きがおすすめです。

右／酒戦図　付当日酒量勝負附　右下／谷文一「闘飲図巻」紙本着色「後水鳥記」所収。「後水鳥記」は太田南畝による酒戦の観戦記のこと。酒の文字を水と鳥に宛てている　左／酒合戦番付　飲んだ酒量に合わせ番付が行われている。世話役となっている「鯉隠居」は、千住の青物問屋の主人で、鯉の絵などをよく描いたという

1 昭和13年建築の「タカラ湯」外観。錦鯉が泳ぐ池のある庭が見もの　**2** 千住には古い建物を活用した飲食店も多い　**3** 北千住駅西口の通称「飲み横」は昭和の香りが漂う。戦後のバラックから始まった間口の小さな店、さらに伸びる路地にも店が連なるラビリンスなエリアとなっている　**4** 路地を進むと見えてくる喫茶店「蔵」。大正期築で、質屋だった蔵を改装した店内は天井が高いので開放感があり、穏やかな雰囲気を漂わせる　**5** 昭和４年建築の「大黒湯」男湯の富士山のペンキ絵。大黒湯は114枚の絵がある格天井も見どころのひとつ

散策に便利な情報がいっぱい！ちょっと昭和レトロな雰囲気の「千住街の駅」